

十回に亘つて連載した「高田国事犯事件の真相」は昨日を以て一先づその稿を終つた。当時事件に連座した志士は既に概ね世を去つて地下に眠つて居る。生き残つてゐる少数の人達は半世紀に近い星霜の推移に隔世の感禁する能はざるものがあるであらう。記者は当時の志士にして今高田附近に住んで居られる二三人の人々から親しく当時の追憶を聞いてこゝに稿を改めて読者と共に当時を偲び度いと思ふ。【平】

岡崎直中老を市内五分一町の閑静な居に訪ふ。岡崎老の一族一一と言ふよりは八木原繁址氏の一族一一皆揃つて『当時事件に連座した同志だつた。即ち八木原繁址氏を始めその兄弟九人(男三人、女九人)の中、弟に当る井上平三郎氏も赤井景韶氏と共に高等法院まで呼び出された仲間であつた。姉妹六人の中三人まで、一人は今村致和氏に、一人は樋口亨太氏に、一人は当時入牢した志士に嫁いでゐた。つまり兄弟五人揃つて時の自由党の同志として活躍したのである。記者が訪問した時、折よく今村致和氏の遺族の方も来合わせ居て岡崎老と交々當時を語つて聞かせた。

『事件の発端と言ふのは御承知の通り明治十六年の三月十六日越中高岡で開かれた自由党の北陸八(七)州大会で私はその大会には参りませんがこの大会を機会に検事(補)堀小太郎が大島安治といふ男と共謀して一騒ぎ起すべく長谷川三郎といふ男を手先に使つたのがあんな大騒ぎになつてしまつたのです。長谷川といふ男は当時今の高陽館のすぐそばに居た大森といふお医者様の書生をして居たが中々才子肌の男で自由党員の為にも重宝がられて居た男です。それが北陸大会の時堀検事(補)から金をつかませられて密偵の格で高岡に行つたのです。何でも四百円ばかり堀から貰つたといふ話でした。その長谷川も高岡へ行つて見た時は自由党員の国事を憂ふる熱誠に動かされてすつかり改心し八木原に向つて感激の涙まぢりに自分の心情を打明けて前非を悔いて大会に出ずに帰途についたのだそうです。処が高田へ帰つて来ると堀から金を貰つてあつた手前としてまさか同志の行動は実に見上げたものだとも言へないで、とうく出まかせに大臣暗殺の陰謀などと言ふ事を喋舌らされたんですね。

さて愈々国事犯といふ事件が持上つた時の話ですが、北陸八(七)州大会が三月十六日にあつて僅四日後の三月二十日の朝、まだ暗い四時ごろに警察の人がドヤ／＼やつて来て物を言ふひまもなく遮二無二引つ張り出してその日の中(うち)に私は牢に入れられてしまひました。当時私の家は今師範学校のある川原町にありましてそこから今の横町裏の牢屋まで引つ張られて行つたのです。八木原も今村も樋口もみんな牢へ打ち込まれ井上平三郎は高岡で捕へられて護送されて来て一族みんな牢屋入りといふ事になつたのです。

その頃の牢屋といふのは極めて狭いもので横町裏の牢屋は地元の黨員だけで一杯になつてしまひました。牢屋の中の模様も随分おかしなものでした。先づ一番入口に近い所に「親方」と称する一組が並んで居てその次には「隠居」といふ一組が居り、一番奥には「新参」といふのが居たのですが「親方」といふのは牢屋へ入れられた仲間でも古参株で強盗やその他重い罪で終身懲役だの何十年だのといふ刑を着た連中「隠居」と言ふのはそれ程でもない罪人で「新参」といふのは字の如く牢屋の新参者で、牢へ入る時には真つ裸にされて新参の部屋へ打ち込まれ、そこで「親方」と「隠居」に対して新参の披露をするのです。それは『私は何々の罪によつて今日からお仲間入りをします』といった様な具合でそして何か芸の出来るものはそこで一芸演ずるといふ馬鹿げ切つたものでした。そして夜にでもなれば「新参」は「親方」の足を揉ませられたり肩を叩かせられたりしたものです。

### 兄弟五人が揃つて入牢

牢屋でも特別待遇

岡崎直中老の談



私等はそれでも普通の入牢者とちがふといふので「新参」を通り越してすぐ様「隠居」の待遇を与へられました。面白い事には牢へ入つて居た連中は、私等が国事犯で挙げられたのだと聞くとみんな言ひ合した様に『全くこんな馬鹿げ切つた娑婆つちやねえ。国家の為に大いにやつてくれ。どうせ俺達も満足な身分ぢやねえんだから、そうなつたら大臣の家へ火でも何でもつけてお手伝ひします』といふ様な事をいつたものです。独り自由党のみならず当時の世は挙げて自由民権を標榜して居たのです。』

岡崎老の話は続く。

『何しろ国事犯と言ふのですから事件は大したものだつたが、さてその証拠はどこにあるかと言ふと間に言ひました通り、堀や大島などの手合ひが仕組んだ芝居の様なものですから証拠などあがりつゝはありません。騒ぎだけは引つくり返る様な騒ぎで肝腎の証拠のあ



がらぬ為に、糸を引いた堀の手合ひも少し不安になったものでせう。一同を牢へ入れてしまふと、翌日からは嚴重な家宅搜索が始まつたのです』

こゝで岡崎老の奥さんが口を挟む。

『全くそりやひどいんですよ。土足のまゝで警察の方々が大シ／＼座敷でも二階でも上り込んで手当たり次第に引つ掻き廻すんですからね。台所の戸棚から便所の中までも見ました。丁度私の家では風呂をたつて居りましたら、この風呂桶も怪しいといふので折角沸いた風呂をすつかりおとさして桶の中から裏まで検(しら)べるんですからね。随分しやくに障つたものです』

『そんな訳で同志の誰の家を探し廻つても国事犯の証拠になる様なものは何も出て来ない。たまに誰かの家から刀が出たの拳銃が出たのといふと、さも大発見でもしたかの様にそれを証拠品にしようとしたものですが、当時士族の家にはどこにだつて刀の一口(ふり)や二口ない家はありませんよ。それだのにその刀や匕首(あいくち)を大臣暗殺に使用する目的でしまつて置いたんだらうなどと勝手な言(い)が、りをつけたものです』

『そうして探し廻つた挙句、唯一の証拠品として押収したのが赤井の家の紙屑籠の中から出た所謂斬奸状なるものです。今だから大きな声でも言へますが、当時赤井と井上と風間の三人が大臣を暗殺する決心だつた事はたしかです。そして三人が各(お)中仙道から江戸に乗り込むものと三国峠を越えて乗り込むものと、加賀街道を行くものと手分をして秘密に入京して各々その暗殺すべき大臣も予め決めて置いたものです。然しその事を当時県の常置員だつた鈴木や八木原が聞いてそれだけは断然思ひ止まらせたのです。その時の書類が赤井の家の紙屑箱の中にも鼻をかんであつたのを拾ひ出して「動かぬ証拠はこれである」とばかりに国事犯の断定を下してしまつたのです』

『それから牢屋に入つて居るものを一人づゝ出しては嚴重に調べたのですが私等はずとく国事犯など言ふ事は思ひも寄らぬ事ですから何時まで経つても埒があかず牢に居る事たしか五六十日で放免になりました。当時国事犯は取調べられる時には目の所だけ穴のあいた黒い覆面をかぶせられたものです。今でも私はその覆面を持っています。そして私共が牢から出たのが一番早い組で次に私等より五六日後に又一組放免され、最後まで残されたのが赤井と井上と風間の三人でした。この三人はどう／＼高等法院まで送られたのです』

『いよく高等法院まで引き立てられる事になり私共一族は井上を見送つて茶屋町まで行きました。井上は山笠をかぶせられ五六人の巡查に護られて引かれて行きました。勿論乗り物などには乗せません。話をする事など到底出来ませんでした。茶屋町まで行くともう見送りの許さぬから帰れと言はれ、そこで涙ながらに井上を見送りました。井上は被つて居た山笠をポンくと叩いてそのまゝ物も言はずに行きましたが、それは心配すると言ふ意味からだつたらしいです。全く今思ひ出しても馬鹿げた騒ぎだつたものですよね』

(岡崎老の談終り)

### 高田国事犯事件の思ひ出(三) . . . 高田新聞(昭和四年六月三十日)

#### 密談の最中 不意に闖入(ちんにゆう) 長谷川すつかり狼狽 小島周治老の談(1)

小島周治老を新井町小出雲渋江川べりの閑居に訪ふ。老は今年七十八才、国事犯事件当時は三十一といふ働き盛りの年輩であつた。膝も崩さずに端然と座した儘老は語る。

『越中高岡で北陸八(七)州自由党大会が開かれるといふ時の事でした。始めは頸城から出発する希望者は余りありませんでしたが、八木原繁址と井上平三郎の兄弟が出発すると言ひ土肥善四郎は商用で高岡まで行くといふので同行すると言ふしそれに長谷川三郎も行くといふから頸城でそれだけ出席すれば充分だといふのでその送別懇親会を柳糸楼で開いたものです。二十人ばかり同志が集まつて盛んに気焔をあげました。その席には堀検事(補)も大島安治も長谷川三郎も出席しました。そして送別懇親会だけは至極円満に終りましたがそのあとで一寸面白い事が持ち上りました。

当時同志の面々は何れも血氣盛りの連中ばかりでしたから何れも田端や横町あたりに巢喰つてゐたものです。中でも横山環、風間安太郎、赤井景韶それに私などは一番ひどかつた様です。で柳糸楼の懇親会が終るや例によつて私と横山環がどこかで二次会をやつてゐると話がたま／＼堀や長谷川の事に移り「彼奴等(あいつら)もどこかで飲んでゐるだらう」と噂してゐる所へ女中が「堀さん等は福原に御出の様です」と告げたので横山が「それでは行つて一つおどしてやらう」といふので福原といふ料理屋へ出かけて行き廊下二階へコソソリ登つて不意に襖をガラリと開けて闖入(ちんにゆう)した所、中には堀と大島と長谷川の三人が額を鳩(つ)めて何事か密談してゐた最中だつたそうです。三人はすつかり狼狽してしまつたが横山は別に大して気にもかけずにそのまゝ帰つたのです。勿論何事の相談をしてゐたのか知らなかつたのです。

さて愈々高岡の大会へ行く事になると長谷川は妙にイラ／＼した様な態度になり殊に同行の井上平三郎に対してはますます敬遠する様な態度が濃厚になつたさうです。そして高岡に行かぬ中(うち)に帰ると言ひ出し一人で先に引返して来た所を伏木あたりでどういふ為か捕縛されてしまつたさうです。私等はその報を聞いて長谷川は一体どうしたのだらうと不審に思はずには居られませんでした。が、当の長谷川とすれば以前横山に密談を聞かれたとのみ思ひ込んで気がでなかつたらしいのです。

そこで私等は長谷川が捕縛されたといふ真相を知るべく堀検事に聞いて見ましたが何も知らぬといふのです。安達という検事に聞いて「二三日すれば護送されて来るからその時になれば真相がわかるだらう」との事でさつぱり要領を得ませんでした。

所が伏木から護送されて来た長谷川は糸魚川の少し先迄来るとどういふ訳か放免されたのです。私等には何が何やらさつぱり分りま

せんでしたが、何も知らぬと言つた堀検事(補)は大島安治と共に毎日の様に五智あたりまで長谷川の帰りを迎へに出て居たんだそうです。そして放免されて来た長谷川に会ふや否や一体どうした訳かと尋ねた所、いっそや福原の二階の密談を聞かれたのだと打ち明けたそうだが、そんな事から一層何とかして早く同志を引上げてしまはねばならぬと決心したらしいのです。

○ さて三月二十日……当時私の家は小出雲の今の専売局出張の入口にありましたがその日私は村の相談があつて当時の村長は大塚吉太郎さんの親御さんの時で私もそこへ行つて相談の仲間入りをして居た所へ目黒と言ふ刑事が巡查を二人連れてやつて来て一も二もなく引つ立てられてしまひました。全く寝耳に水でした。

○ 私等の入れられた牢は今の太漁座(たぎまぎ)の前身の芝居小屋で現在の位置の向ひ側にあつたものです。その芝居小屋の中に六尺四方板囲ひで仕切り更に二尺の間隔を置いて又板囲ひをするといふ具合に仕切つてその臨時造りの囲ひ牢の中へ一人づゝち込まれました。全部で二十人余りも居りました。留置されたのは五十日余りだつたと覚えて居ります』(続く)

#### 高田国事犯事件の思ひ出(四) …… 高田新聞(昭和四年七月一日)

##### お尋ね者の 赤井からの手紙 四十円調達の苦心 小島周治老の談(2)

『さて話は少し飛んで赤井が石川島の監獄を脱走し松田といふ男と逃れる道すがら、車夫を殺した後の事になります。さあそうなる」と国事犯どころか今度は何をし出かすか知れぬといふので上を下への騒ぎになりました。赤井は頗る大胆な男でゴソ／＼人目をぬすんで逃れる様な事は余りしなかつたのでそれが却つて警察の目にとまらぬらしかつたのです。一緒に脱獄した松田は翌日早くも板橋で捕へられたが赤井はさつぱりつかまらぬ。そうなる一旦放免された私等の身辺にまで又警察の目が光り、赤井のその後を知らぬかと毎日の様にたづねて来たものです。外出する時など大ていの時は尾行がついたものです。

○ 実際赤井は脱獄後どうしたものか我々同志の間でも知つて居るものではなく徒(いら)ずらに気をもむばかりでした。ところがその年の秋頃になつて私が所用先から帰宅して見ると飯山の山田憲治といふ名の差出し人から私の所へ手紙が来て居ました。山田などといふ男は一向知らぬので不審に思ひながらも封を切つてヒョット中を見るとそれは思ひもよらぬ赤井からの手紙でした。私は何気ない風を装つてその手紙を受けとつたまゝ別室へ行つてたつた一人でその手紙をよくよんで見ました所、脱獄後の経過をこまごまと書き「今は甲府の在にある寺に坊主となつてすみこんであるが近く逃げねばあぶないと思ふから金を四十円送つてくれ」と書いてありました。

○ 今でこそ四十円ですが当時四十円といへば中々大金で、まだ親爺も生きてゐた頃の私としてはその調達は容易ではありませんでした。思案に余つて私は赤井からの手紙を懐中にして所用にかこつけて高田へ行き八木原に頼み込んだのです。八木原としても最早色々の金を使ひ込んで四十四円の金を右から左へ調達する訳には行かなかつたのでこれもその時の同志の一人だつた加藤貞盟にでも頼んで見ようといふ事になり、それがよからうと言ふので加藤の所へ出かける事になつたが、さて其出かける人間に困つたのです。と言ふのは中々警察の目が光つてゐて余程気をつけぬとすぐ疑はれる時でしたから、で色々相談した結果八木原の弟の孫ちや(井上平三郎の事)に行つて貰ふ事とし、孫ちやはその日暮れてから夜に紛れて樋場の加藤の許(もと)へ忍んで出掛けたのです。

○ 孫ちやが漸くの事で加藤の家まで忍んで行つたのはよかつたが其時には既に加藤の家では錠をかけて寝てゐたのでその錠をあける為に又一苦勞したそうです。ガチャ／＼やつてゐる中(うち)とう／＼番人に感付かれてしまつたのです。番人はつきり泥棒と間違へて大声で「泥棒々々」とど鳴り散らす。もし警察にでも知れれば事は破滅になると思つたのでまごちやはとに角主人に会へば分る事だから騒ぐなど番人を叱りつけてやつとの事で加藤に会つたそうです。そして私の所へ来た赤井の手紙を見せて加藤に金策を依頼したのです。加藤もその時四十円とゐる金は持合はせてゐなかつたが二三日中には何とかするが然しその金を誰が持つてゆくのかと加藤に問はれて孫ちやもハタと困つてしまつたのです。結局誰か適當の人を見つけてから金を取りに来るといふ事にして孫ちやは帰つてきました。

○ 成程誰がその金を持つてゆくかといふ事はまだ誰も考へて居りませんでした。そこで八木原の家で又色々相談して人選をした結果八木原の頭に浮んだ絶好の人物があつたのです。……』(続く)

#### 高田国事犯事件の思ひ出(五) …… 高田新聞(昭和四年七月二日)

##### 坊主に変装して 金を届けに…… しかもそれも水の泡 小島周治老の談(3)

『甲府在の寺に坊主となつて逃げ隠れてゐる赤井の所へ四十円の金を持つてゆく大任を託すべき人を色々詮衡した結果これならばといふ白羽の矢が立てたのは柏崎在にゐた猪俣為治といふ男でした。思ひ立つたが吉日だといふので早速その場から支度して八木原が柏崎まで出掛けその夜の中(うち)に猪俣をつれて戻つて来ました。私と今村は木田の五智街道あたりまで迎へに出てゐると元気よく二人でやつて来たので一まつ安堵しましたが加藤の所から金が出来て来るまで猪俣をどこに泊ておくかについて又一心配でしたが結局寺町の来迎寺(過日故鈴木昌司氏の贈位報告祭の行はれた寺)の住職に頼み込んで寺に泊て貰ふ事にしましたがその為にはすつかり坊主らしい格好で来て貰はねばならぬとの住職の注文だつたので猪俣は止むなく頭を剃り黒衣をきて寺の厄介になりました』

○ 『さて一方金を持つてゆく人間が見つかつたので早速今村が加藤の所へ出向いていつて金を受取りそれを猪俣に託し猪俣は坊主姿で愈々甲府在を目ざして出発したのです。その頃はまだ汽車などはないので夜を日に継いで中仙道を急いだのでした。漸く目的の甲府在のお寺について赤井を尋ねた所赤井はその寺も危険になつたと感じてか三日前に何処とも知らさず寺を出発してしまつたといふ事でした。折角のこちらの苦心も水の泡でした。何でもその時赤井の考へでは四十円の金で神戸から米國へ高飛びする積りだつたらしいのです。その時の参考書類は沢山あつたのですが家に置くと面倒だと思つて直江津の知人の土蔵にしまつて置いた所明治廿二年に火事に逢つてすつかり焼いてしまいました。惜しい事をしたと今でも時々思ひ出します』



『愈々赤井も逃げ切れず東海道島田宿の附近で捕へられ東京に護送され鍛冶橋の監獄に投ぜられ公判が開かれるといふので私が東京に上つて行つて赤井の安否をたづねるべく出発する事になりました。信州の上田までは格別の故障もなく行きましたが上田から高崎へ行く時に大変心配しました。と言ふのは当時高崎から東京まで汽車が通じて居て高崎へ午後三時迄に行かなければ汽車に乗る事が出来ないのです。上田から馬車を仕立て、碓氷を越える積りで居ると丁度その日上田に馬車の検査があつて一台も雇ふ事が出来ないのです。ホト／＼閉口した揚句止むなく人力車を飛ばす事にして車屋に掛合つて見ると車夫も高崎までと聞いて尻込みしましたが二人挽きでやつて若し午後三時迄に高崎へ着けば賃金は倍にしてやるとの条件付きでやつとの事で車を出して貰ひました。碓氷の難所を車夫は威勢よく突破し高崎に着いたのは三時に四十分も前でした』

○ 『高崎で汽車の出るまで駅の前の茶屋で休んで居るとその時その茶屋に東京から来たらしい書生が居て頻りに赤井の後半の噂をして居るのです。東京の事情を聞きたくて矢も楯もたまらぬ程でしたが疑はれるのがいやさにとうとう書生さんの話を聞き流して汽車に乗り夜の八時頃上野に着き翌日赤井を訪問する事にしてその日は宿屋で一泊しました』

○ 『さて翌日愈々鍛冶橋の監獄に赤井を訪問すべく出掛けました。裁判所へ行つてその向き話をして会見方を頼み込むと始めは会はせる様な口吻(こうふん)でしたが急に面会は断じてならぬとキツパリ断つてしまつたのです。癪にさわつて仕方ありませんが何としても駄目な話ですから私もホト／＼弱つてしまひどうしたらよからうと思案に暮れて居る時、天の助けか思ひがけなく救ひの主が現はれたのです』

一一一(続く)

### 高田国事犯事件の思ひ出(六) . . . 高田新聞(昭和四年七月三日)

#### 志士赤井の堂々たる最後 古歌、古詩を時世に 小島周治老の談(4)

『救ひの主といふのは例の大井憲太郎氏です。私が裁判所で途方に暮てゐる所へ通りかゝつてどうしたのだと聞かれるので「実は赤井に会ひたいと思つて来たのですが面会は絶対にならぬとの事で困つてゐる所です」と答へると大井さんが暫く考へてあましたが添書をした手紙をくれて、これを持つて行つてもう一度頼んで見よといはれたので早速その通りやりますと今度は面会を許すといふ事になつたのです。さて面会するとなつても予めその用向を裁判官に話しそれ以外の事は絶対についてはならぬといふ条件のもとに看守が四五人も附添つて面会する段取りになつたのです。

○ 『矢来に二尺四方位の窓があつて看守がその窓掛を捲き上ると赤井は窓から顔を出しました。飛びつきたい程私もなつかしかつたよ。赤井は夏縞の着物を着て髯などもサツパリと剃つて私の思つたより小奇麗ない風をしてゐました。さて私の用事とゐふのは赤井亡後(なきのち)の相続の話で私その旨赤井にたづねますと本人はそんな事には一向無頓着でそれよりもその後の同志の行動を聞きたがるのです。私もその胸中を察して相続話にかこつけて遠廻しに同志の連中の消息をいつて聞かせますと赤井はよく吞込んで如何にも嬉しさうな顔つきでした』

○ 『その中(うち)段々話しが進むにつれてとう／＼看守に聞きたがめられ看守はあわて、窓掛を下ろしてしまはふとするや赤井は窓掛をしつかり支へた儘大喝一声「貴様等が何を知つてゐる」と怒鳴りつけたものです。その見幕に恐れてか、それともいくら頑張つて見てもやがては死刑にならねばならぬ赤井の胸中を察してか、そのまゝ窓掛をおろす事を断念してしまひました。それからはずつと私も話しがしよくなつて猪俣為治に金を託してやつた事からすべてを話してやりました。如何にも残念そうな心持がよく分りました』

○ 『さて愈々死刑ときまつたので私等は上告する様すゝめましたが赤井はこの上二十日や一月生きのびても何にもならぬからこんな馬鹿どもを相手に上告などしたくないといひ張りましたが結局皆の意見に従つて上告する事になりました。その時の官選弁護士は元田肇と高橋某といふ二人でした。然しその結果は赤井のいつた通り二十日か一月位生きのびたといふにすぎませんでした』

○ 『たしか七月二十八日だと覚えてをりますが愈々赤井の死刑が執行される事になり私等は死骸引取人として十四五人で市ヶ谷監獄へ出かけました。絞首台上の露ときえる最後の赤井の態度は実に堂々たるものでした。絞首台へ上る前に獄吏が目かくしをかけやうとする時赤井の時世の古歌や古詩はみんななくしてしまひ文句も忘れてしまひましたが実に堂々たる最後であつた事だけは確です』

○ 『死刑が執行されるや私等は監獄の裏口にまつてゐるとすぐ赤井の死骸を引渡してくれました。真つ白の着物に包まれた赤井の死骸も綺麗なものでした。その前松田が死刑になつた時矢張私も死体引き取人の仲間でしたがその時は鼻から鼻汁がたれて居て見苦しかつたものです。赤井の死骸には少くともそんな見苦しい所はありませんでした』

○ 『葬儀は「自由の燈火」といふ新聞社(今の朝日新聞のあつた所?)から出しました。式に連らなつたものは諸国の同志のもの四五十人で盛大な葬式でした。墓地は谷中でそこへ行くまでにこの一代の志士の死をきいて葬列に加はるものが益々ふえ谷中へついた時は二三百人も並んで居たのでした。 . . . . . (小島老の談終り)

### 高田国事犯事件の思ひ出(七) . . . 高田新聞(昭和四年七月四日)

#### 便所へ行つて差入の交換 一つとせの歌が祟る 上田良平老の談

上杉村役場に上田良平老を訪ふ。

○ 『国事犯事件の事は今まで御紙に掲載されてをり、今更私が事新しく申上げる程の事もあるまいと思ふ。国事犯事件後の自由党のことなら又別に面白い事もあるが国事犯そのものに関して私から殊更言ふ程の事実はない』

『私が牢へぶち込まれたのは二十二年の年だつた。三月廿日の朝巡査が三人来て物をもいはず上杉村の自宅から引立ていつた。着物を着がへるにも一々巡査がつき切りで家人にも何もいふ事が出来ず一同何事が起つたのかと心配してゐた様だつた』

『私は大漁座組で、牢へぶち込まれて見ると同志の面々が沢山やられてゐるのを知つてその中(うち)には却つて痛快にさへなり出した。毎日牢にゐて退屈には違ひなかつたが本を読む位は許してあつたらそれを何よりの楽しみにしてゐた。差入れをしてくれるものも段々多くなり、しまひには牢の中で差入れの交換をやつたものだ。便所へゆく時にソツと自分の所へ来た差入物をかくして持つて出て態よく他の連中と交換したものだ』

『その中に便所へゆく事を禁じられたのには一番閉口した。各自に便器を一つづゝあてがつて一切便所にはやらぬ事にした。つまり差入れの交換などしたのが祟つたのと、もう一つは誰か便所の中へ同志の事について何か書いておいたのが看守に見つけられてそれで便所へ行く事を禁じてしまつたらしい。差入れの交換が出来なくなつた不都合以上に、便器で用を足す不快さが甚だしかつた』

『その中(うち)に一人づゝ段々取調べが始まる。もとより誰一人として深いたくらみなどなかつたのだからいくら取調べられても知らぬ存ぜぬ一点張りだから埒の開く筈はない。私も前後三回調べられたがいつも取調べは夜になつてからで牢から裁判所まで引き出されて行き、黒い覆面をかぶせられて取調べられるのだが、警戒の嚴重なことは大したもので法廷内に巡査や看守や廷丁など十何人もゐてしかも内から鍵をかけるといふ甚だしさだつた。そして裁判官は居丈高になつて白状せよとおどすのだが、こつちは「何を抜かしやがる」位なつもりでテンから相手にならぬので、しまひには足踏みするやら手を振り上げるやらしておどすが何をしてもこつちは平氣の平左。一向口を開かないから結局業を煮やしながら夜おそく迄取調べても何等の手がゝりも発見できずに終るだけだつた』

『その間に何か証拠になるものを発見する積りで三度も家宅搜索をしたそうだがもとより何も見つかりつこはない。所が最後の取調べの時、裁判官が何だか紙片を持つて来て「この紙片はお前の家から出たが、この紙片に書いてあるのは政府倒壊の意味だろう」とおどしつけるので一体それは何のですかと聞いて見ると、一つとせの歌が書いてあるだけ他は何も書いてない反古紙同然の紙片を何処から見つけて来たものか私の家から押収して来たといふのだ。馬鹿々々しくて話にも何にもなりやしない。その歌といふのはフランス革命の時の時世を歌つたもので、それを日本で一つとせの節になぞらへて作り変へたものだつた。成程役人どもには時節柄絶好の不穩文書に見えたのだらう』

『すべてこんな有様だつたのだから今から考へるとおかしなものだつたが、それでも当時にすれば取調べる方も調べられる方も心の中には真剣な所があつただけは事実だ。今の時世と比較してその点だけは特に異(ちが)つてゐた事が何よりも深く印象に残つてゐる……』

(終り)